

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02717

研究課題名（和文）地域との協働で創るグローバル市民育成モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a Global Citizen's Cultivation Model through Collaboration with the Local Community

研究代表者

廣津 公子（HIROTSU, Koko）

立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・講師

研究者番号：50793593

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、地域のために行動している留学生に共通する資質を洗い出し、地域についてウェブサイトで発信するプログラムを考案して、グローバル市民としての資質が養成できるか検証した。その結果、異なる背景を持つ者同士が協働しながら地域について知り、学習言語で発信していく過程で、言語使用者としての自信をつけるだけでなく、地域を見る視点や相手の立場に立った見方を獲得し、母語や言語観をはじめとした自身の振り返りも促されていることがわかった。そして、この活動自体が「グローバル市民」というものを捉え直す機会となり、地域や世界とつながる自分に必要な様々な力を涵養する可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化の進展により、大学教育においてもグローバルに活躍できる学生の育成が求められているが、「グローバル市民」とはどのような人かを学生とともに考える機会は希少である。そこで、本研究では、学生の半数が留学生という特徴を持つ立命館アジア太平洋大学の学生を対象に、グローバル市民に必要な資質についての仮説を立て、学習言語で地域について発信しながらグローバル市民として成長していくためのプログラムを考案した。その上で、この活動を通してグローバル市民とは何かを問い直し、地域とつながり、多文化共生社会に寄与する力を養う多文化間共修の実践例を提示した。

研究成果の概要（英文）：This study identifies attributes common to international students who are acting for their local community, describes a program designed to cultivate attributes of global citizenship through the use of a dedicated website where students exchange information about their local communities, and examines the effectiveness of the program. As a result of the process of working together and communicating about the community in their target language of learning, students from different backgrounds not only gained confidence as language users but also gained new perspectives on the community and the point of view of others, which encouraged reflection on themselves and their views on languages, including their native language. A further outcome was to frame this activity as an opportunity to rethink "global citizenship" and cultivate various skills necessary to connect oneself with the local community and the world.

研究分野：日本語教育

キーワード：グローバル市民 地域 言語学習 国際共修 ピアフィードバック ライティング ウェブサイト 誘い

1. 研究開始当初の背景

立命館アジア太平洋大学(以下 APU)は留学生が学生全体の約半数を占める国際大学であり、授業は日英両言語で受けることができる。原則として入学後の1年間、留学生はキャンパスに隣接した寮で生活するため、多様性に満ちた学習・生活環境が保証されている。しかし、その反面、キャンパスの立地や日本語使用機会の制限により、地域との接点は減ってしまうという現状がある。廣津他(2016)の研究において、APU 生が今いる場所とつながり、知る機会が乏しいことがわかっているが、APU の教育活動について詳述された『混ぜる教育』(崎谷・柳瀬 2016)の中で、寺島実郎氏は、グローバル人材という、英語が堪能で生まれた地域にこだわらないコスモポリタンのような人をイメージするかもしれないが、実際にはその逆で、地域に溶け込んだ人間のほうがグローバル社会で尊敬される存在になりうるはずであると述べている。有田(2005)は、留学生と地域社会の「交流」は自然に放置されたままでは出来上がらないという認識を持つことが必要であると提言しているが、どうすれば、真に「混ぜる」ことができるのだろうか。

本研究は、加藤(2014)を受け、個人としての自覚を持ち、共同体をより良くするための課題を見つけ、責任を果たすことができる者を「グローバル市民」と定義し、どうすれば見知らぬ土地に溶け込み、その地域とつながる「グローバル市民」に近づけるのかという問いに答えるべく開始した。

2. 研究の目的

本研究は、グローバル市民とは何かを問い直すとともに、グローバル市民を育成するためのモデルとなるプログラムの提案を試みるものである。APU では数多くの地域交流の機会が提供されているが、APU 生を対象に行われたこれまでの研究において、留学生が地域や地域住民とつながっていないことが窺われる結果が出ている。しかし、同時に、グローバルな視点で地域の問題に取り組み、ローカルな視点で課題を解決することができる留学生がいることもわかっている。両者にはどのような違いがあるのだろうか。

そこで、本研究では、まずこういった地域のために行動している留学生に協力を仰ぎ、彼らの持つ問題意識や行動から共通する資質を洗い出す。その上で、その共通点を組み込んだ新たなプログラムを創出し、この活動を通して、グローバル市民としての資質を育てることができるのかを検証する。

3. 研究の方法

まず、これまで行ってきた地域とつながる研究や活動を通して出会った学生の中から、地域での活動や、地域と学生をつなぐ活動に積極的な留学生3名に依頼し、個別に半構造化インタビューを実施した。インタビューでは、自身が考えるグローバル市民とはどういう人か、自分はグローバル市民だと思うかを尋ね、そこに至るまでのライフラインを書いてもらった。次に、そのライフラインを見ながら、これまでの経緯を詳細に述べてもらった。1人につき1時間から1時間50分のインタビューを3回実施し、データを文字起こした後、複線径路・等至性モデル(以下 TEM)を用いて TEM 図を作成した。TEM とは、ある共通のゴール(等至点)にたどり着いた人々が、どのような影響を受けて分岐点で選択をし、その後どのような経過をたどってゴールにたどり着いたのかを丁寧に記述する研究手法である。本研究では「地域のために自ら行動できる」ことを等至点とし、どのような経験や選択を重ねてゴールにたどり着いたのか、彼らの選択を支えたり、妨げようとしたりしたものは何かを分析し、記述した。作成した TEM 図を提示しながら、フォローアップインタビューで確認と修正を重ね、地域のために動ける人が持つ資質やきっかけを洗い出し、グローバル市民に必要な資質についての仮説を立てた。

次に、その仮説を検証するために、グローバル市民としての資質を培うきっかけとなるプログラムを考案した。この活動の立ち上げと運営に携わった学生6名に対し、2022年3月、個別に半構造化インタビューを行い、参加した理由や意識の変化、ウェブサイト運営の上での課題などについて聞いた。2022年度は新たなメンバーを迎え、インタビューで聞いた声を参考に、定期的な意見交換を行いながら、ウェブサイト「びばべっぴ」(次項で解説)での活動を継続した。活動の成果を知るため、この1年の活動に関わった学生のうち、インタビューへの協力が得られた10名に対し、2023年1月から2月にかけて、前回と同様の半構造化インタビューを行った。

4. 研究成果

(1)TEM によるキーワードの抽出

地域での活動や地域と学生をつなぐ活動に積極的な3名の留学生が、地域のために自ら行動できるようになるまでの TEM 図を作成した結果、「ロールモデルを見つけ巻き込まれる力」「内省しアウトプットする習慣」「多様な活動の場」「地域や他者のために行動することが重要だ」という4つの共通点が見られた。3名とも高校までに特別な経験や活躍をしてきたわけではなく、地域のために何かしたいと考えて大学を選択したわけでもなかったが、大学入学初年度に学内外問わず多くの活動に参加していた。また、身近にいる尊敬できる人や目標となる人から

の誘いが、様々な活動に足を運びきっかけとなり、積極的に関わっていくようになったという傾向があった。各々振り返りができるアウトプットのツールを持っており、それを使って定期的に振り返りを行い、自分に起きた出来事を俯瞰して意味付けたり学んだりしていた。そして、それぞれの活動から得た知識やスキルが活用できる場所を学内外のどちらにも持ち、次の行動に活かそうとしていた。その行動は地域や他者のためである場合が多く、誰かのために行動することが重要で、それが自身の喜びにもつながると感じているようであった。

以上を踏まえ、「誘い」「ロールモデル」「振り返り」という3つのキーワードを導き出した。これらの要素を含むプログラムに参加することが活動の場1つとなり、これまで以上に地域や他者のために行動することを意識できるようになれば、グローバル市民としての資質の涵養につながるのではないかと考えた。この考えのもと、モデルとなるプログラムの考案に着手した。

(2) 「びばべっぴ」の立ち上げと活動の広がり

研究開始当初は TEM 図をもとに拾い出した共通性が体験できる対面参加型のプログラムを想定していた。しかし、2020年3月頃から Covid-19 の影響が広がり、地域で活動を行うことが難しくなっただけでなく、留学生が入国できなくなった。このような未曾有の事態を受け、オンラインでできる活動を模索し、大学生が言語を学びながら地域について発信するウェブサイト「びばべっぴ」の立ち上げを計画した。教員の「誘い」によって参加した学生が、この活動を通して地域を知り、地域の人と触れ合う中で「ロールモデル」となる人と出会い、ウェブサイトの運営や記事の執筆に携わりながら、地域のために活動することの意義を考えるようになるのではないかと考えた。記事の執筆自体を、地域と自身の関係を言語化する「振り返り」のツールと見なすと同時に、インタビューにおいても、経験や思考、活動の意義の振り返りを行った。投稿した記事や写真が、入国できない学生と地域を媒介する役割を果たし、入国後に学生を地域に誘い出すことにも期待した。

ウェブサイトのデザインはイラストが得意な学生が担当し、地域のランドマークや特徴を描いたイラストを随所に挿入して、ユニークなものに仕上げた。「まちを知る」と「まちのスター」という二つの主要なセクションを設け、「まちを知る」の中に「みる」「よむ」「とびこむ」というサブセクションを作った。「みる」には、地域の日常の風景を切り取った写真に短いキャプションをつけたものが掲載されている。「よむ」は学習言語で書いた記事を掲載するページであるが、基本的に日本人学生は英語で、留学生は日本語で執筆している。記事の内容は、住んでいる地域に関することという制限は設けているものの、経験・場所の紹介・フィクション・エッセイなど、ジャンルを問わず好きなスタイルで創作活動を行い、スタッフ間でフィードバックをしながら完成させた後、掲載している。「とびこむ」はイベントを告知する場であり、地域の中に入って楽しむための情報を得ることができる。ただ、参加者を募り、実際に集まってイベントを開催できるような社会状況ではなかったため、スタッフが少人数で交流を深めるためのイベントに活用した。「まちのスター」は、人の才能に焦点を当て、星座のように人から人へつないでいくことをコンセプトに始まった。身の回りにいる地域とつながる活動をしている人が持つ魅力と才能について、短い文章で紹介している。ウェブサイトの管理は、ウェブサイトの機能に詳しい学生とデザインを統括する学生が主に担当していたが、彼らからの提案で、専門的な知識が必要ない範囲で作り、写真や記事のアップロードなどの簡単な作業は各自で行えるようにすることで、人が替わっても継続できる環境作りに努めた。

「びばべっぴ」に参加する学生は、所属機関の言語教員の推薦などにより少しずつ増えていった。活動に興味を持ち、ボランティアとして時々ミーティングに参加する学生もいたが、継続的にウェブサイトの管理・運営に携わる学生や、定期的に記事を執筆する学生については、面談の上、学生スタッフとして雇用し、謝金を支払った。2021年秋学期からは、月に1回程度オンラインでのスタッフミーティングを行い、お互いの進捗を報告したり、課題を話し合ったりした。その中で、ウェブサイトの訪問者を増やすための工夫として、SNSとの連携や取材時にウェブサイトを紹介するための名刺の作成、スタッフ間の親睦を図るためのまち歩きなどの提案があり、学生主導で実践した。2022年春学期からは、大学の授業の多くが対面になったことで、ミーティングもハイブリッドにし、回数を月2回にして、スタッフが顔を合わせる頻度を増やした。記事の質を高めるために、記事の執筆や編集の経験が豊富なスタッフやジャーナリスト志望のスタッフにワークショップを開催してもらった。交換留学などにより、学期ごとに参加メンバーの入れ替わりはあったものの、常時8人から10人ほどの学生がスタッフとして活動に携わった。研究者を含む教員の直接的な誘いだけでなく、徐々にウェブサイトやスタッフに誘われて加わる仲間が増え始め、多様な背景や興味を持つスタッフが集まった。それに伴い、日本語と英語の記事に加えて、韓国語や中国語の記事も生まれた。記事を完成させるまでの期限やノルマは設定しなかったが、2023年3月までに約50本の記事が掲載された。新たにインドネシア語の記事も執筆が始まっており、今後掲載される予定である。

(3) 参加者へのインタビューを通して

2021年度末と2022年度末の2回にわたり、「びばべっぴ」の活動に参加した学生スタッフを対象に半構造化インタビューを行った。1回目のインタビューでは、すべての学生がこの活動を知る教員の「誘い」によって参加しており、「誘い」が行動のきっかけになることが確認できた。多くの学生が活動への参加を言語学習の機会と捉えており、ウェブサイトをとともに作るコミュ

ニティで、学習言語の使用者として成長したいという期待が感じられた。地域に対しては、肯定的な感情を抱いていたが、参加したことによって距離が縮まったり、新たな出会いのきっかけになったりした様子は見られなかった。参加学生同士が直接交流する機会もほとんど持たてておらず、複数の学生が信頼関係構築のためにもスタッフが直接会う機会が必要であると述べた。また、学生の自主性に委ねすぎず、教員がより積極的に介入すべきではないかという意見も複数あげられた。

そこで、2022年度は、言語を学びながら、より自律的に地域について発信できる方法を検討し、新たに加わったメンバーとも意見交換をしながら活動を続けた。年度末に行った2回目のインタビューにおいては、授業とは異なり、書きたいように書ける喜びがあると同時に、トピック・言語・レベル・文体・ジャンル・読者の想定など、多くの選択肢と向き合い悩みながら、各々が異なるアプローチで自身の求める書く活動を実現していることがわかった。記事のピアフィードバックでは、日本人学生と留学生が互いに手段を駆使して言葉の持つニュアンスを伝え合い、相手が表現しようとしていることを尊重しながらより良い表現を探し、共に1つの作品を作り上げていく姿勢が見られた。その過程においては、地域を見る視点や相手の立場に立った見方だけでなく、母語や言語観をはじめとした自身の振り返りも促されていた。

2回のインタビューの中では、「グローバル市民とは何か」という問いも投げかけた。学生からの回答には、自己と他者に敬意を払い、多様な価値を受け入れ、柔軟に適応できる力、言語の壁を乗り越える力、コミュニケーション力、柔軟性、自分の意見を伝え歩み寄り力、物事が円滑に進むように媒介する力、傾聴力、共感する力、世界への興味と視野を広げる力、つながる力などへの言及が見られた。中には「多言語で聞くのではなく、人として聞ける人」「グローバルという意識がない人」「究極的には、ただいい人ではないか」といった回答もあった。このインタビューが、「びばべっぷ」という活動がどういうもので、何のためにやっているのか、自らの考えるグローバル市民に近づくことに役に立っているのかなどを振り返るきっかけにもなったようである。

(4) グローバル市民育成モデルとしての有効性

研究開始当初は、留学生を対象とした参加型プログラムを想定していたが、オンラインでの活動や運営を余儀なくされたことにより、結果的に対象も方法も想定とは異なる新しいプログラムが生まれた。ウェブサイトの作成にあたり、プログラミングが得意な日本人学生が加入したのをきっかけに、留学生に限らず広く興味のある学生に声をかけることになったが、対象が全学生に広がったことで、より協働での学びが広がり深まったと考えられる。

活動初期は直接会って交流することができない社会状況だったこともあり、初対面かつ言語的文化的背景の異なる者同士が意思疎通を図り、新しいプログラムを生み出す難しさを痛感した。その中で、各々が得意なことを活かして提案を行い、様々なコミュニケーションツールを試したり、自身の役割や立ち位置を見直したりしながら、少しずつ関係を築き、形にしていく経験を積んだ。活動後期はそうやって作られた「びばべっぷ」という場を拠点に、新しいスタッフや記事を書くことを中心に活動するライターと共に、特に「よむ」に掲載する記事の作成に力を入れた。ただ書くのではなく、ピアフィードバックをしてくれる仲間がいることで、自分らしい言葉を探しながら書くことができるようになった。チェックをする立場に立ったときには、単純に書き換えるのではなく、書き手が表現したいことを読み取り、自分の母語や言語感覚を振り返って、照らし合わせながら仕上げていった。学習者同士でチェックし合うよりも、母語話者もしくは熟達した言語使用者から多様な表現を提示され、詳しいフィードバックが得られるため、言語学習面での達成感にもつながったと思われる。ピアフィードバックの過程で相手の思考や言語観に触れたことで、もらったフィードバックも鵜呑みにせず、自分に合ったものか再考する姿勢も生まれていた。同じ言語の使用者であっても人によってこんなにも違うものが出来上がるのだという気づきが、正課の授業で学習言語を使うことへの自信や学びのモチベーションにつながった例も見られた。トピックを選ぶ際には、観光客や新入生が読むならどういったものが有益か、読んでほしい人に届けるためにはどの言語のどのレベルで書けばいいかなど、繰り返し読み手を想像することで、他者の立場に立って考える機会が増えた。必ずしも読者を想定する必要はないため、自分の書きたいものを表現することに重点を置く学生もいたが、そういったケースでは、自分が学んだ言語を惜しみなく使う機会となり、表現する喜びが得られたようだ。書くために、学習言語で書かれた他の読み物やウェブサイト、或いは他の参加者の記事を読み、新しい着想を得て、異なるジャンルの記事に挑戦することもあり、読む作業も必然的に増えたようである。ここでしか発信できないものか、情報は正しいか、広く公開してもいい内容かといった情報リテラシーの面への配慮もしながら、多くの人が訪れるサイトになるための工夫や発信力についても考えることができた。以上のことから、記事を書くときに求められる言語力、表現力だけでなく、それに伴う様々な活動が、協働し、受け入れ、読み取り、提案する力、適応力、傾聴力、振り返る力などの涵養も促したと推察される。

また、オンラインとオフラインの使い分けが、この活動においては重要であったと考えられる。ウェブサイトを活用したプログラムにしたことにより、なかなか入国が叶わない留学生にも情報を発信することができ、言語学習や日本での生活をより身近で現実的なものとして感じるきっかけ作りができた。入国前から参加した学生の中には、「びばべっぷ」のスタッフが描いたイラストをもとに別府を舞台にしたフィクションを書いた学生や、入国したら行ってみたい場所

を決めて記事を書いた学生もいた。コロナ禍で行動が制限されたことにより、結果的に今いる場所の良さを知るきっかけが生まれ、当たり前だったものの魅力に気付いたという声もあった。一方で、直接会って話す機会が増えるまでは、どれだけオンラインのツールを駆使して交流しても、チームとしての団結力はなかなか生まれないこともわかった。記事のピアフィードバックについても、方法は決まっていなかったが、対面で行ったほうが伝わると感じた学生が多く、対面での実施を好む傾向が見られた。直接会ってチェックを行った際には、せっかくだから一緒に食事をしよう、記事に書いた場所へ今から行ってみよう、雑談の中で話題になった本を買いに行こうなど、「びばべっぷ」をきっかけとした行動の広がりも観察された。

このような活動を課外活動として行くと、学生自身が活動の目的や計画を決めることができ、様々な背景の人とも出会えるという面白さがあったが、優先順位が低くなり、取り組みが甘くなってしまふという問題もあった。また、教員が参加すると、留学や卒業などで学生が入れ替わっても活動を継続しやすいというメリットがある一方で、どうしても教員に頼りがちになり、学生主体になりにくかった。こういった点を踏まえ、どのように教員が介入すべきか考える上では、市川・井庭(2022)が参考になる。この中で「つくることによる学び」「創造的な学び」で重要な役割を果たす「ジェネレーター」という概念が述べられているが、この一緒に作ることに参加するジェネレーターの存在が、正に「びばべっぷ」のような活動においては有効だと考える。活動を通して「日常のなかで、凝り固まって、固定化してしまいがちな世界や物事の理解をゆるめ、流動化し、生成的な変化へと変えていく」ことができるジェネレーターとしての役割を果たせるようになれば、自ずと「教員」「学生」という概念も変わっていくはずである。そして、教員を含めた参加者全員が、何気ない気付きを面白がり、本気で参加しながら、創造のスパイラルを生成する力を育むことができれば、より有意義な活動になるのではないだろうか。正課の授業や地域においても、ここで培ったジェネレーターシップを発揮できるようになれば、APUのような国際大学が目指す「世界を変える」人への一歩が踏み出せるのかもしれない。

(5) 今後の課題と展望

本研究を通して、異なる背景を持つ者同士が対話をしながら地域について知り、学習言語で自由に発信していく「びばべっぷ」のような言語プログラムが、「グローバル市民」を捉え直し、地域や世界とつながる自分に必要な力を得る場として機能する可能性が示唆された。しかし、ウェブサイト自体が「誘い」のツールとなり、訪れる人々をどのように巻き込めるかを観察するまでには至らなかった。ローカルに目を向けるツールでもあり、ローカルをグローバルに発信するツールとしての機能も果たし得るこのような活動に、学生はもちろん、教員や地域の人達も巻き込まれ、当たり前を受け入れていたものを振り返り、流動化させるジェネレーターへと成長していけば、どのような面白いものが生み出されるのだろうか。記事が完成したときの達成感や連帯感が、地域や記事への愛着を生み、また挑戦したい、この記事を読んでほしいという気持ちを持って、より多くの読者に届く発信を続けることで、地域の活性化と巻き込まれる人の増加につながるのだろうか。今回は学生の入替わりが多かったことから、2回ともインタビューに応じることができた学生は1名のみだったが、ほとんどの学生が今後も活動に参加する意思を表明しているため、引き続き観察を続けていく。その中で、市川・井庭(2022)を参考に、これまでの教員と学生の概念を崩し、共に創る関係がどのように構築できるかも探っていきたいと考えている。

<引用文献>

有田 佳代子、「地域の「国際化」と大学の貢献 - 留学生交流を中心として - 」、『敬和学園大学研究紀要』、14号、2005、181-197

市川 力、井庭 崇、『ジェネレーター - 学びと活動の生成 - 』、2022

加藤 恵津子、「グローバル人材か、グローバル市民か - 多様な若者の、多様な海外渡航のススメ - 」、ウェブマガジン『留学交流』1月号、Vol.34、2014

崎谷 実穂、柳瀬 博一、『混ぜる教育 80カ国の学生が学ぶ立命館アジア太平洋大学 APU の秘密』、2016

廣津 公子、板橋 民子、松井 一美、『「街を教室にする」プロジェクト：活動型学習における『誘い』の意義』、日本語教育国際研究大会口頭発表、Bali Nusa Dua Convention Center、2016

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 板橋 民子、桐澤 絵里奈、高田 亮、渡辺 若菜	4. 巻 5
2. 論文標題 地域に飛び込んで行う言語プログラムの可能性 サービス・ラーニングの観点からの学びの検証	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 APU言語研究論叢	6. 最初と最後の頁 56～71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34409/apujlr.5.0_56	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Tetsushi Ohara, Wakana Watanabe, Tamiko Itabashi and Fumie Ishimura
2. 発表標題 教育活動を通して考える学びのエージェンシー：大学内外の言語活動の事例をもとに
3. 学会等名 JSAA-ICNTJ2023 (Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia 2023/ International Conference of the Network for Translingual Japanese) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 廣津公子、板橋民子
2. 発表標題 学生が地域で学び、地域について発信するウェブサイトの課題と可能性
3. 学会等名 地域活性学会第14回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 廣津 公子、板橋 民子
2. 発表標題 地域のために行動できる グローバル市民の共通点とは 留学生へのインタビューの分析より
3. 学会等名 地域活性学会 東日本大震災後10年特別大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡辺 若菜、板橋 民子、桐澤 絵里奈、高田 亮
2. 発表標題 続・地域に飛び込んで行う言語プログラムの可能性ーサービス・ラーニングの観点からの学びの検証ー
3. 学会等名 第2回APLJシンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山内 美穂、板橋 民子、廣津 公子
2. 発表標題 対話する場としての「ひるまち にほんご」
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第8回研究集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究で考案した、学習言語で地域について発信するウェブサイト「びばべっぷ」 https://vivabeppu.wixsite.com/vivabeppu
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	板橋 民子 (ITABASHI Tamiko) (80469402)	立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・講師 (37503)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------